2021.10.14

地場産業“浜ちりめん”製造業 吉田社長が語る

サステナビリティへの思い

有限会社 吉正織物工場とは

創業は昭和2年、会社設立は昭和35年になります。

現代表が3代目となり、従業員13名と共に浜ちりめんを作っています。

弊社の特徴は、絹の生糸を仕入れてから生地を仕上げる工程、全てを社内で行っていることです。

仕上げまでに38の工程を要し、どれも疎かにはできず、一つ一つの工程に職人の手が入ります。

この長浜は、西は琵琶湖に面し、東に伊吹山系がそびえます。豪雪の名所で、昔は2～3mも積もることもありました。伊吹山系においては養蚕が盛んで、そののち長浜において絹織物に発展しました。絹の機織には湿度が必要となり、なおかつ精練（絹の不純物を取り除く工程）には水が必要です。そして、何よりも京の都という大消費地を必要としていました。当地は、原料、湿度、水、市場に恵まれたお陰で今日まで発展できたのです。

弊社ではサステナブルな絹素材の製造から始めています。ちりめんを製織する際に出る“糸くず”を集めて再び撚り合せて絹糸を作り、それは当産地内においては巻糸と呼ばれているのですが、“糸くず”の有効利用が当社の起源です。毎日座っても破れたり、擦れたいしない大変丈夫な織物となるため、多くは座布団として利用されてきました。勿論、絹の持つ保温性は抜群で、寒い雪国には欠かせない冬のインテリアとなっています。

戦後には「ガチャマン」と呼ばれる、織れば売れるという時代がやって来て、当社も時流で、“ちりめん”の製造を始めました。創作的なちりめんの製造を得意とし、着物においては人間国宝の先生方にも贔屓にして頂いています。現在では海外展開もスタートし、欧州のラグジャリーブランドから高い評価を頂き、取り引きを続けさせて頂いています。

なぜサステナブル素材の開発を始められたのでしょうか？

5年ほど前から、JETROさんの支援で欧州におけるラグジャリーブランドへのセールスを始めました。そこで「サステナブルな素材は無いのか」との問いを受けたのですが、全く意味が理解できません。スカーフやドレス、ジャケット用途として、それなりに販売実績もついて来ていたため、放置していました。ですが、ある時、バイヤーさんから、「2025年までに目に見える形で対応しておかないと、今後取り引き出来なくなりますよ。」と、助言とも警告とも取れるようなご意見を頂きまして、それから考え始めました。

自発的にというより、むしろ必要に迫られた感じですね？

正しくその通りです。

あるバイヤーさんから、サステナブル素材の指針を示した資料も頂きましたが、膨大な量でしかも英語です。頭を悩ませていたところ、JETROさんから「出来ることから始めるしかないですね」と、助言というか当たり前のコメントを頂き、取り敢えずサステナビリティの勉強から始めました。

サステナビリティの理解と対応は進みましたか？

当初はオーガニックやリサイクル、低炭素排出、低水利用による素材を生産していたら、それがサステナブル対応になると理解し、その開発に取り組んできました。実は今回発表するのはその成果なのです。しかし、勉強していく過程で、サステナビリティとは提供する素材だけでは無いのだと気付きました。ただ、全体としてはまだまだです。

このNecoS以外に提案出来るものはありますか？

リサイクルシルク（再生絹糸織物）があります。これは弊社の真骨頂といっても良い素材です。そもそも、湖国は三方よしで有名な近江商人発祥の地で、「始末」を大切にします。始末とは、「そのものの命を大切に使い切る」といった意味合いです。手間ひまかけて育てたお蚕さんが、命がけで作ってくれた絹糸を捨てることなく、全て使い切ろうとの精神が活きています。昔は“糸くず”を集める業者さんが存在し、それを糸に紡ぐのは農家の大事な内職でした。高齢化のため内職をされる方もいなくなった現在、100％“糸くず”からではありませんが、工業的な紡績機械を用い、他の屑の絹原料と混ぜてリサイクル紬糸を再現することが出来ました。

今回、東京で開発された素材を発表されますが、どの様な成果を期待されますか？

勿論、注文を頂くことが重要ですが、リサーチの側面も大きいです。我々のように地方で機屋を営んでいるだけでは、ファッションにおけるサステナビリティへの対応がどの様なものなのか、なかなか理解出来ません。

サステナビリティの実現には、参加者全員の理解と実行が必要と感じています。

勉強を始めてから、弊社には改善すべき点が多いと実感していて、それについても赤裸々に吐露しつつ、弊社を理解して頂ける方を増やしていきたいと思っています。

今後の目標は？

まずは産地について、そして“ちりめん”の良さを知って頂く事が重要と考えます。欧州においては、その耐久性、メンテナンスの容易さなど、実用面が高く評価されている一方で、日本においては我々の努力不足もありますが、ちりめんは着物用とみなされやすく、ファッション業界での理解が進んでいないのが実情です。

しかし、業界だけに留まらず、世界規模で共有されつつある新たな価値の変化に合せて、サステナブル素材としての“ちりめん”を知って頂きたい。先人が伝えてくれた“ちりめん”は、強力な撚糸をかけているため、実用性・耐久性に優れています。昔は親から子へ「洗い直し」「染め直し」をして伝えた生地です。これ程にまで丈夫なため、一般の日常着としても十分に使用に耐えたのです。

今後も我々は、ちりめん製造を通じて、持続可能な企業として変革を図って行くつもりです。